

保育者になるために今すべきこと

What You Should do now to Become a Caregiver

三宅 美由紀*

(平成29年10月25日受理)

要約

幼稚園教育要領に、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであると規定されている。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならないとも言われている。保育所保育指針にも保育所は、子どもが生涯にわたる人格形成にとって極めて重要な時期にその生活時間の大半を過ごす場であるとされている。ここでは、そのような大切な時期に幼児にかかわる現職保育者の自己評価をふまえて、これから保育者を目指す学生が理想とする保育者になるためには、どのようなことを学生時代に身に付けることが必要なかを明らかにした。

キーワード：信頼関係、人間性、資質向上

keywords：Trust relationship, Human nature, Quality improvement

1. はじめに

保育者になるために今すべきことは何かをより具体的にイメージすることのできる授業を行うことが望まれる。そのためには、まず保育者を目指す学生が保育者のことをどのように考えているのか、また、現職の保育者がどのような課題をもち保育をしているのかを知ることが必要である。

「教師・保育者論」の学びでは、学生が目指す保育者像を明確にし、保育に関する知識を深め、理論や実習からの学びを通して、教師・保育者としての資質の向上を目指している。また、学生自身のこれまでの経験を振り返り、その結果を活用し自から望ましい教師・保育者像を構想し、乳幼児の育ちの援助、その家族を支えることのできる保育者を目指すことを、目標としている。

そのためにも、保育職がどのようなものであるか、またその大切さを学生に伝えることから始めたい。

乳幼児にとって園では、保育者（以下 保育士、教諭を含めて保育者とする）は、親と同じ存在で

あり保育者の行動、言葉、しぐさ、表情、態度等すべてが乳幼児にとってはモデルになる。クラス担任をすると、保育室の中には、担任と同じ行動をし、同じ言葉を使い、しぐさまで同じ乳幼児がクラスのあちらこちらに見られる。乳幼児たちは園生活の中で保育者と同じ行動、態度を身につけるようである。これまでいろいろな保育所や幼稚園で担任をしている保育者と乳幼児の様子を見てきたが、本当に担任そっくりな乳幼児たちに驚くことがある。

それほど乳幼児にとって保育者は大きな存在であることを学生たちにも知らせることで、どのような保育者を目指したいのか、そのためには、学生時代にどのようなことを身につけることが、必要なかを考えていきたい。

教職の意義と保育者の役割、法的・制度的な知識は勿論しっかりと学ぶことが大切である。それに加えて、豊かな人間性、感性を身に付けることが大切であると考えている。豊かな人間性や物事を豊かに感じるができない保育者では、乳幼児の

(*みやけみゆき 保育科講師 幼児教育学)

内面を理解したり、保護者を支えたりすることは難しい。

理想の保育者になるためには、保育者はどのようなことを身に付けることが大切なのか。また、保育者を目指す学生は、保育者のことをどのように考えているのか学生の意識を知ること。そして、現職の保育者の自己評価から、園の目標を達成するには、保育者としてどのようなことに取り組んでいるか、自己評価の結果を今後の保育にどのように役立てているのかを明らかにすることを目的とする。以上のことを踏まえて、教師・保育者として、身につけるべき心構えを再度考え教育計画を見直していきたい。

そこで本研究は、学生の教師・保育者として身につけるべき心構えを現場のニーズに近い具体的なものと近づけられるよう教育計画を見直すことを目的として、学生および現職の保育者を対象に調査を行った。調査1では、学生を対象に理想の保育者について、調査2では現職の保育者を対象に保育での取組や課題についてアンケート調査を実施した。

2. 方法

(1) 調査1：学生自身が経験した保育所、幼稚園に対する意識調査

①対象

対象は「保育課程総論」の科目を受講している本学第一部学生49名、第三部学生80名、合計129名のうち出席者120名である。

②方法、および手続き

「保育課程総論」の授業内に、質問用紙を配布し回収した。学生からの質問に対しては、随時答えた。また、質問用紙を配布する前に、数名で自分が通っていた保育所、幼稚園で覚えていることについて話しをする機会も与えた。

有効回収率は100パーセントである。

③項目

調査内容は、学生のプロフィールに関する質問と「園の思い出」「保育士・先生の印象」「理想の保育者像」などである。

(2) 調査2：現職幼保一体化施設の保育者に対する意識調査

①対象

幼保一体化施設の現職保育士14名、現職幼稚園教諭6名、合計20名である。

②方法、および手続き

質問用紙を一人ずつに手渡し、1週間後に個々に回収した。

有効回収率は100%である。

③項目

「生活のリズムを整え、健康な心と体を育んでいるか」「人とかかわる喜びを感じ、愛情や信頼感を育んでいるか」「身近な自然や環境に親しみ、科学性の芽生えを育んでいるか」「よく見、よく聞き、よく考えて自分の思いを表現する力を育んでいるか」「ねばり強く自らやろうとする意欲や態度を育んでいるか」という質問項目である。

3. 調査(1)の結果及び考察

(1) 学生自身が経験した保育所、幼稚園に対する意識調査

①保育所・幼稚園の思い出

図1は、自分自身が一生懸命に取り組み、何らかの成果や結果があったものや、幼い心に強く残った印象的であったものが上位を占めている。

保育所・幼稚園の思い出では、運動会や劇などの行事的な活動で、長期間取り組んできたことや戸外遊び泥団子作り、竹馬など自分自身が努力したり、没頭したりして遊んだ遊びは思い出として心に残っていることがわかる。このことについては、保育者がこの時期の幼児の発達段階を踏まえ計画的に、意図をもってかかわってきたであろうということが窺える。また、学生から出された遊びの種類の多さから、保育所や幼稚園ではいろいろな遊びを通して、経験や体験をしていることも読み取れる。

②保育士・先生の印象

図2は、質問用紙を配布する前に数人で話しをさせたときにもいろいろなグループから聞かれた

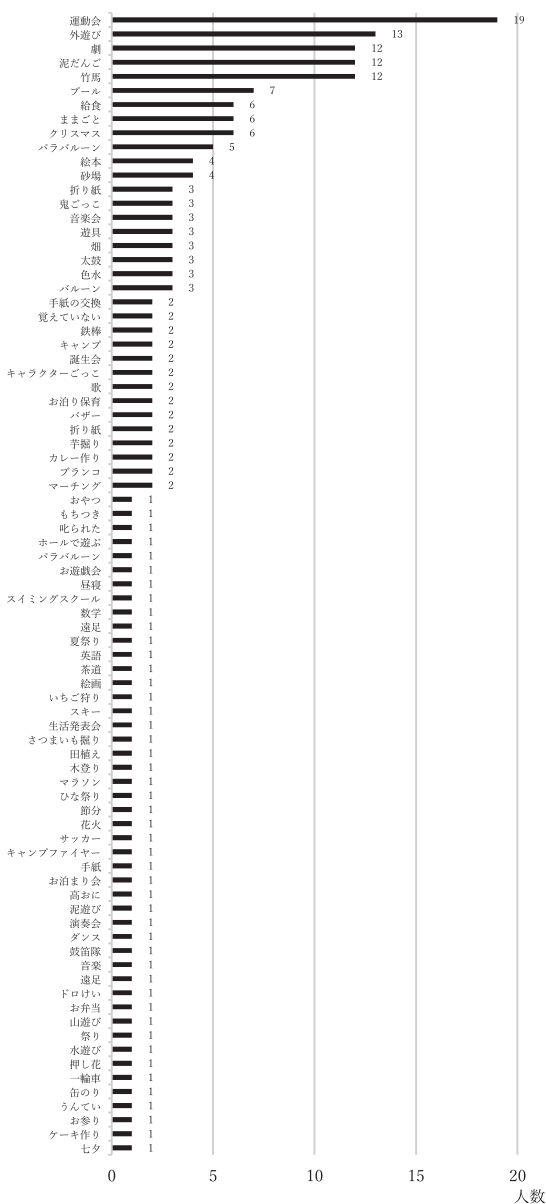


図1 保育所・幼稚園の思い出

が、保育士や先生を思い出すと、その時の場の雰囲気や、状況が思い出されるという学生が多かった。

保育士・先生の印象からは、保育士や先生は優しい、いつも笑顔という学生の回答が半数以上を占めている。反面、厳しい、怖いといった印象を

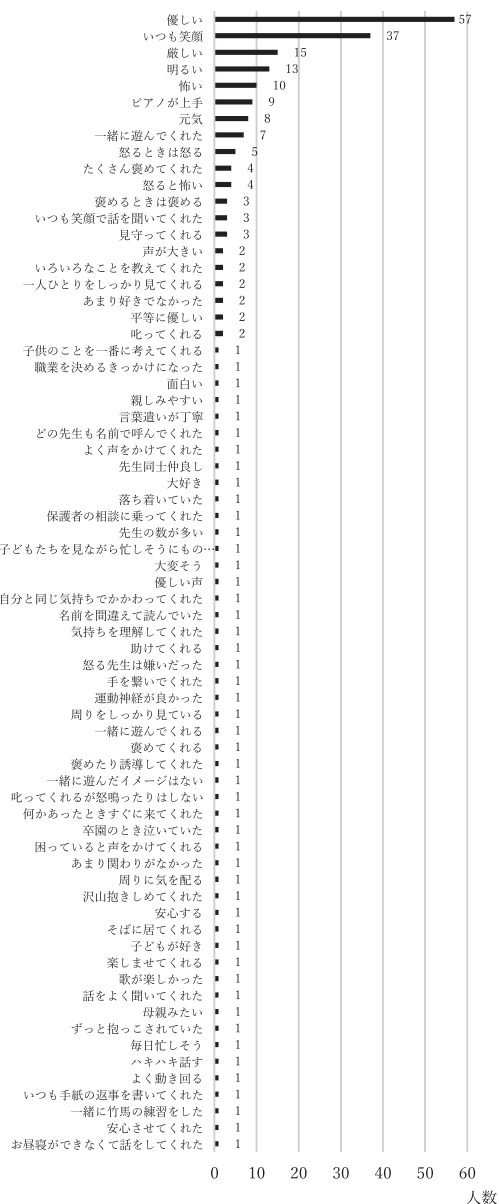


図2 保育士・先生の印象

持っている学生も少なくないことがわかった。

このことから、幼児期に優しくしてもらったり笑顔で接してもらったりした保育士や先生に対して好意や、憧れの気持ちを持ったということが読み取れる。また、厳しい、怖いと答えた学生はどのような場面でそのように感じたのかを機会があ

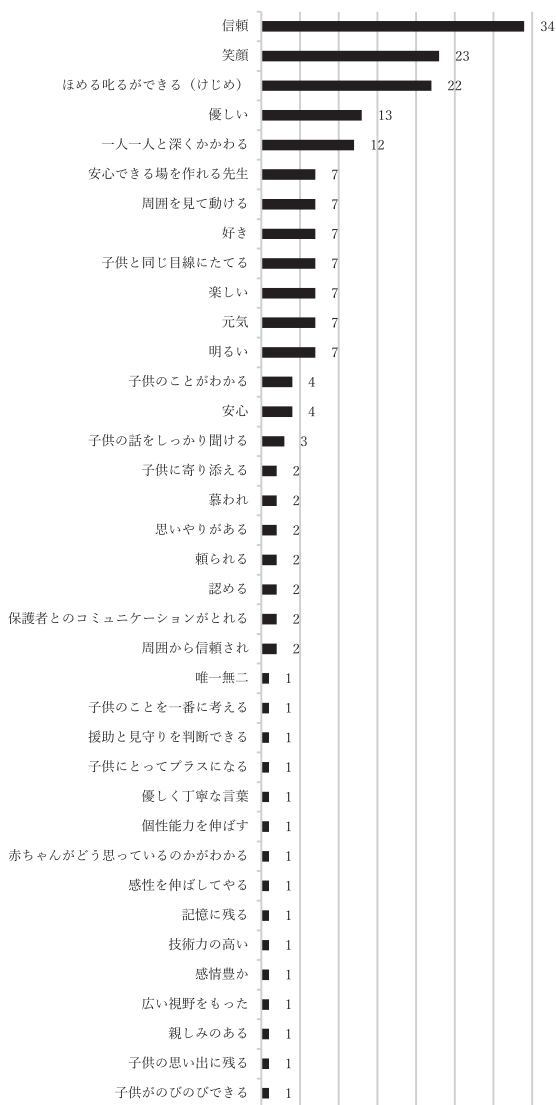


図3 理想の保育者像

れば調査してみたい。

少人数ではあるが、「～してもらった」という回答や保育士や先生の動きや声、しぐさなども覚えていることに驚いた。このようにしてみると、保育士や先生から乳幼児が受ける影響は大変大きいことがわかる。

③理想の保育者像

図3は、子供が可愛いから保育士や先生を目指している学生が多いと考えていたが、保護者に対しても保育者としてきちんと関わりたいという思いを持っているということが分かった。理想の保育者像では、乳幼児からだけではなく保護者にも信頼される保育者になりたいという回答も多くみられたことから、保育者は、乳幼児の育ちを培うだけでなく、乳幼児の後ろには、保護者がいるということ、その保護者も巻き込んで支えていくことが必要であるということを経験生たちも感じているということが読み取れる。また、優しさも必要であるが、褒めること叱ることが出来る保育者、一人一人の乳幼児と深くかかわることができる保育者を目指したいという回答も多いことから、これからは担う乳幼児をしっかりと育成できる保育者になりたいという希望が読み取れる。

4. 調査(2)の結果及び考察

(2) 現職の幼保一体化施設の保育者に対する意識調査

①基本的な生活習慣の確立と決まりある生活態度の育成

表1は、0～3歳児は生活のリズムは、家庭での生活の仕方が大きく関わってくる（保護者中心の生活である）ため、生活のリズムが整っていない乳幼児には保護者に具体的に繰り返し話し、生活リズムの大切さを伝える。また、乳幼児自身にもリズムが整えられるように絵本や紙芝居等を使って知らせたり解りやすく繰り返し話をしたりすることが大切である事が分かる。

4～5歳児は、学年の最初は、特に気を付ける必要があるが、自分のことは自分でする習慣がついているため、しばらくして生活が落ち着いてくると生活のリズムは整ってくる。しかし、早朝保育、延長保育を利用している幼児も多いので、自分でできるからと、すべて幼児に任せしてしまうのではなく、その日の体調や様子を見ながら休息等をとるなど保育者が援助することも大切である。

また、一日の大半を園で過ごしている幼児も多いので、保護者に一日の園での様子をなるべく具

体的に伝えるなどの配慮が必要である。

このことから、子供たちは家庭を背負って来ていることを保育者が理解し、保護者との本当の信頼関係ができないと生活のリズムを整え、健康な心と体を育めないと考える。

②様々な体験活動を通して、人と関わる喜びを感じ、愛情や信頼感、自尊心を育む。

表2は、0～3歳児は、保育者との信頼関係を基に、友達とのかかわりを広げていくことができるため、信頼関係が大切である。また、乳幼児自身が関わり方や思いの伝え方が分からないときは丁寧とその都度伝え、教えることも大事である。

表1 生活のリズムを整え、健康な心と体を育てているか

園の目標	実践目標	評価項目	達成率
1. 生活リズムを整え、健康な心と体を育む。	「早寝、早起き、朝ごはん、運動」の生活リズムを徹底する。	「早寝、早起き、朝ごはん、運動」の大切さを、食育だよりや講演会、園からの話の中で保護者に知らせ健康な身体を作る。 栄養士による食育教室や絵本などの教材を取り入れて遊び、体に良い食べ物を意識できるようにする。	78%
	体を動かす遊びを取り入れ、体力を向上させる。	竹馬・竹ボックリや巧技台など、いろいろな運動用具を使いバランス感覚を養う遊びを工夫する。 鬼ごっこやかけっこなど集団での遊びを取り入れ、友達と遊ぶ楽しさを味わう。目標達成カードを作り、シールを貼るなど各自が自分の目的を持って取り組めるようにする。	73%

A：達成できている B：まあまあ達成できている C：あまり達成していない D：達成していない
表1から表5の達成率はA：達成できている B：まあまあ達成できていると答えた人数から計算したものである。

表2 人とかわる喜びを感じ、愛情や信頼感をはぐくんでいるか

園の目標	実践目標	評価項目	達成率
2. 人と関わる喜びを感じ、愛情や信頼感を育む。	地域、異年齢児との交流の場を持ち、相手の思いを感じながら遊ぶ。	保護者・地域の人・ふれあい児・中学生・小学生と遊ぶねらいを明確にし、年間計画を立てて実践する。 スキンシップのできる遊びを多く取り入れ、一緒に遊ぶことが楽しいと思える遊びの内容を工夫する。 いろいろな遊びを教えたり教えてもらったりしながら、できた喜びを感じ、自分の行動に自信を持つ。	73%
		交流する人によって、自分の置かれる立場が変わることに気づき、状況にあった関わりができるようになる。また、楽しかったことや嬉しかったことを自分の言葉で表現できるようになる。 触れ合うことで「信頼」「愛情」「尊敬」「憧れ」「思いやり」など、様々な感情が生み出されるような言葉かけをし、教師自身が意識して関わっていき、温かい関係を築く。	
	親子スキンシップの遊びや講話から、親も子も「あなただけが大好き！」の気持ちを持つ。	参観日にふれあい遊びの時間をとり、スキンシップをしながら親子がゆったり向き合える時間を確保して、子育ての喜びを感じる場を工夫する。 子どもにとって「心の基地はお母さん」ということを理解してもらう為に、講演会を通して保護者自身が学べる場を提供する。 端午の節句・父の日・母の日・誕生日・ひな祭りなどの節目を捉え、父母・祖父母などの温かい思いを教師が代弁し、大事にされていると感じる。	71%

そして、参観日等では、親子でスキンシップ遊びを取り入れ、親子で触れ合える機会を作り、子育ての楽しさが感じられるように配慮するなど、保護者支援も大切である。

人とかかわる喜びを感じ、愛情や信頼感を育むには、異年齢児に対するあこがれや思いに共感し、一緒に遊ぶ機会を持ちながら遊びを教えてもらったり、自分の思いを伝えたりできる場を多く持つなど計画的、意図的に機会を作ることが大切である。

4～5歳児は、その保護者や幼児とのかかわりの中で、信頼して園に通ってもらえるように努力していく必要がある。保育園部に関しては、早朝保育や延長保育を利用している保護者とは、なかなか話をする機会が持てないため、保育士間の引継ぎをしっかりと行い連絡の漏れがないようにしている。また、幼稚園部は園のバスを利用している保護者と顔を合わす機会が少ないので担当が、

時間を見つけてバスに乗り、保護者と話す機会を持っている。このことから、保育者と乳幼児の関係性の大切さは勿論のことであるが、保育者と保護者が顔の見える関係を作ることが非常に大切であると考ええる。

③豊かな遊びと経験の中で、感性や表現力、知的
好奇心、科学性の芽生えを培い生きる力を育む。

表3は、0～3歳児は、季節の移り変わりを保育者が、敏感に感じ取り、乳幼児が自分から気付けるよう何気ない会話の中から話題づくりをするように心がけたり、身近な自然に興味、関心がもてるよう、みんなで身近な自然を見る機会を作ったりしてきた。また、やってみたいと思ったことが試せるよう環境設定も大事である。

4～5歳児の担任は、身近な自然や環境に親しみ、科学性の芽生えを育てているかという質問に対して、自分自身が苦手な部分であるという。「草

表3 身近な自然や環境に親しみ、科学性の芽生えを育てているか

園の目標	実践目標	評価項目	達成率
3. 身近な自然や環境に親しみ、科学性の芽生えを育む。	自然の移り変わりに気付き、“なぜ？”“どうして？”と考え、探求する気持ちを持つ。	身近な自然物を使って“おもしろい”“やってみたい”“どうして”と子どもの探究心や遊びを工夫し試してみようとする意欲を高める。	72%
		やってみたいと思った時に、すぐにできる環境（材料や用具、廃材、図鑑、絵本など）を作る。	
		自然の中で見つけた生き物（かたつむり、おたまじゃくし、ざりがに、まるむし、かめなど）を飼育し、かわいがりながら、命の営みを知る環境を工夫する。	
		雨や雲、風、雷、氷、雪など、興味を持てるような自然の事象が起こったときに意識して話題にし、自然に興味や関心が持てるようにする。	
身の回りにある環境（自然や物）を使って、試したり工夫したりする。		四季折々、地域に出かけ、野の草花、芽吹きの子葉、花から種、落葉、木の実などの自然に目を向けたり、変化に気付いたりし、感性を豊かにする。	62%
		昔ながらの草花を使っての遊び（れんげやたんぼの首飾り、花冠、ブローチ、ピイピイ笛、草相撲、芋づるの綱ひきなど）を知りやってみようとする。 自然物を使って自分のイメージしたもの（飾り、ゲームなど）を作る喜びを感じたり、遊びに必要なものを作ったりしながら考える力をつけ創造力を育む。	
		色水やはんこ遊び、泥団子作りなど、遊びながらそのもの持っている特性や変化を知り、みんなで考えたり、試したりする場を持ち遊びを広げる。	

花摘みや自然物をつかった遊びを経験したことが少ない」「生き物の世話や飼い方なども経験したことがないため、分からないことが多い」「図鑑やインターネット等で調べたことを幼児に伝えることはできた」など手探りであった。「幼児と一緒に経験したことを活かせるようにこれから努力したい」また、「先輩や地域の方などに教えていただく機会を作っていきたい」と回答している。

このことから、保育者自身が季節の移り変わりを敏感に感じ、乳幼児たちと一緒に見たり感じたりする時間を大切にすることが必要である。

保育者は、周囲のことに気づいたり物事に敏感であったりすることが、感性を豊かにし、ひいてはそれが感性を磨くことになると考える。

④地域、家庭、園、学校との連携

表4は、0～3歳児は、乳幼児一人一人の発見や感じている事、考えやイメージなどに十分耳を傾け、受け止めたり、共感したり認めたり他児に

も広げたりし、何気ないつぶやきも大切にくみ取り、思いを共有する時間を持つことの大切さを感じた。また、落ち着いて話を聞いたりものを見たりできる雰囲気づくりも大切である。

4～5歳児は、話せるように意識的に話し合いの場を設けるなど、日々の保育の中で自分の思いを伝える機会を作ってきたことで、少しずつ自分の考えや思いが言えるようになってきている。幼児一人一人の姿からその幼児に対する目標をきちんと持ち、目標に向けた援助や言葉かけを保育者は心掛ける必要がある。

このことから、乳幼児とかかわる中で、発言は勿論のこと行動、しぐさ、心の動きなど一人一人の内面をよく知ることが大切であると考ええる。

⑤保育士・教師が共に専門性を磨き、良さを取り入れながら、資質向上を図る。

表5は、0～3歳児は、身の回りのことは自分でやりとげられるように指導してきたので、自分

表4 よく見、よく聞き、よく考えて自分の思いを表現する力を育てているか

園の目標	実践目標	評価項目	達成率
4. よく見、よく考えて、自分の思いを表現する力を育む。	人の話や絵本の読み聞かせに興味や関心をもち、イメージを膨らませながら聞いたり話したりする。	毎日絵本に親しみ、年間200冊以上の絵本に触れ、絵本が大好きな子どもを育てる。	67%
		見たこと、感じたことを身体で表現し、お互いの思いを伝え合いながら、お話の世界にイメージを広げ、想像力を育む。	
		正しい姿勢、聞こうとする気持ちをもって、人の話をしっかりと聞く態度を養う。	
		自分の思いや考えを言葉で伝えたり、相手の思いに気づいたりしながら、自己主張できる子どもを育てる。	

表5 ねばり強く自らやろうとする意欲や態度を育てているか

園の目標	実践目標	評価項目	達成率
5. ねばり強く、自らやろうとする意欲や態度を育む。	自分で課題をもっているいろいろな遊びに取り組む。	繰り返し挑戦し、出来た喜びや達成感が味わえるような遊びを提供する。(なわとび、こま、かるた、パズル、竹馬、バカボコなど)	75%
		自分の決めた目的が実現できるように必要な用具を準備し、認めたり励ましたりしながら、達成できるように見守る。(色水の濃さ、泥だんごの固さ、シャボン玉液作りなど)	
		友達の得意なことを知り、自分もやってみようと憧れの気持ちをもち、お互いに教えあったり、競争したりしながら取り組む。	

でできる幼児が増えてきている。また、友達からの刺激を受けあいながら取り組めるように、友達の間を見る場を作ってきた。一人一人の発達段階から今頑張っているところを捉え、それに合った励ましや認めをしていくことが大切で、そのことがやってみたいと思える意欲につながる。

できなくて悔しい気持ち、やめたくなりそうな気持ちにも共感し、その姿を認めながらできなくても諦めないと思える気持ちを育てていくとも大切だと思う。

4～5歳児は、目の前に課題があると継続して取り組むことができるが、何かしようと発案する幼児が少なかったため、自主性を育てるためのクラスづくりを進めていきたい。(5歳児)

自分でしたい、しようとする意欲はあるが、それぞれの良さを共有していくことが難しいのが課題である。(4歳児)

このことから、ねばり強く自らやろうとする意欲や態度を育むためには、乳幼児一人一人の姿をしっかりと捉え、保育者が、遊びを意図的、計画的に用意することが乳幼児にとって大切であることがわかる。そのためには、保育者の専門性を磨き、資質向上させることが大切であると考えている。

5. 総合考察

結果(1)の学生による意識調査から、保育所や幼稚園の頃のことは、始めは思い出せない学生もいたが、友達と話をする中で、一つのことを思い出すと次々に、自分が通った保育所や幼稚園での経験や体験が思い出されたようだ。また、乳幼児期にかかわってもらった保育者の声やしぐさ、してもらったことなどをその時の雰囲気と共によく覚えているなど、乳幼児期は保育者が偉大な存在であるということが、今回の意識調査で分かった。保育者を目指そうとしている学生たちには、乳幼児期にどのような保育者としてかかわることが、乳幼児にとって大切なことなのか、またそのかわりによって乳幼児の人格形成に大きな影響を及ぼすということを伝えていきたい。

結果(2)の現職の幼保一体化施設の保育者に対する意識調査から、乳幼児との信頼関係は勿論のこ

と、保護者との信頼関係の大切さ、地域との連携なども必要であることがわかる。

保育者自身が、日々乳幼児と向き合う中で乳幼児一人一人のありのままの姿をしっかりと受け止め、乳幼児の内面を理解し、発達の段階をとらえ、その姿から、保育者自身の保育を振り返り課題や保育の方向性を見極め、それに向かって日々努力することが大切であるということがわかる。

それに加え、仲間同士の支えあい、良い意味での競い合い、そして園全体で乳幼児を健全に育成することを目的とする保育者集団を目指し、日々努力することが必要であると考えている。

(1)(2)の結果から現職保育者は、目の前の乳幼児の姿から、保育を計画、実行し、保育を振り返り、反省、評価する力をつけ、その反省、評価と日々向き合いながら、より良い乳幼児の育成を目指す努力をしていることがわかる。このように、保育者として日々自分の保育と向き合い、専門性や知識、技術を高めていくことが大切である。それに加えて人間性を高めること、豊かな感性を身に付けることも大切である。

現場での取り組みから見えてくることをしっかりと踏まえ、「教師・保育者論」という科目を通して保育者を目指す学生たちに、よりよい保育者像を伝えていきたい。そして、乳幼児一人一人を正しく理解し、人格形成の基礎を培い生きる力の育成を目指して、保育者として必要な力をつけることができるよう努力してほしい。また、学生を指導する側として、シラバス等の見直し検討等を行い、理想の保育者を送り出せるように努力していきたい。

〈参考文献〉

文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008年10月
厚生労働省「保育所保育指針解説書」2008年5月

謝辞

本意識調査実施に当たり、協力くださった一体化施設の先生方に心より御礼申し上げます。